

2005年8月1日

## 軽井沢・塩田平旅行

### はじめに

今年の3月東京ステーションギャラリーで開催された戦没画学生美術館無言館の展示会を見て、是非一度、無言館に行きたいと考えていた。一方、時代の変遷と共に変わり行く軽井沢も見ておきたいと思い、夏休みの混雑を避けて、7月19日(火)~7月23日(土)に軽井沢・塩田平を訪れた。

### 7月19日(火)

町田駅を10時50分発、新宿、大宮経由で軽井沢には12時55分に到着した。ホテルは歩いて10分のところであるが荷物があるので駅からホテルに電話して迎えに来てもらった。予約したホテルはホテルマロウド軽井沢で大賀道路と呼ばれる道路の



突き当たり右側にある。大賀道路沿いにある大賀ホール(左の写真)はソニーの大賀氏が退職金を軽井沢町へ寄付して、矢ヶ崎公園内に建設したもので、今年の5月にオープンしたホールで週末に演奏会が開催されているようである。ホテルのチェックインは15時なので、荷物を預け、夕食と朝食の予約をして早速、散策に出た。大賀道路から

直角に伸びる唐松林に囲まれた狭い道路を西に進み、南北に伸びる駅前道路(東雲交差点)を横切り、更に西へ、六本辻を横切って、雲場池へ、池のほとりの雲場亭でコーヒーを一杯、雲場池は南北に細長く樹木に囲まれた静かな池(下の写真)である。

外人がスワンレイクと呼んでいると言われるが白鳥はおらず、カモの数家族とバンがいた。池に沿った遊歩道を北に進み、池の北端から自動車道を雲場川に沿って北へ進むと鹿島の森に到達した。ここにはホテル鹿島の森と旧軽井沢ゴルフクラブがある。ホテルの敷地内には雲場川の源流、御膳水という名所があった。ここから唐松林の中の自動



車道を東に進み精進場川を渡り三笠通りを東南へ進むと有名な軽井沢銀座の地域に入る。軽井沢銀座通りではウインドウショッピングをしながら進み、中ほどから右に曲がり皇室のロマンスで有名な軽井沢会テニスの脇を通り、矢ヶ崎川に沿って「ささやきの小径」と呼ばれる道路を南に下りホテルに戻りチェックインした。中庭には唐松、もみじ、白樺などがあり静かで落ち着いた雰囲気のホテルである。ホテルのレストランは地域でも有名なフランス料理の店だそうで、事実、非常に美味しかった。

7月20日(水)

今日は塩田平を散策することとした。ホテルから大賀ホールのある矢ヶ崎公園を通り軽井沢駅まで歩き、9時55分発のしなの鉄道に乗った。しなの鉄道は長野新幹線の開通で、信越本線が廃線となり、その軽井沢～長野間の設備を引き継いだ鉄道である。ワンマンカーの導入、多くの駅の改札廃止など徹底した合理化が図られているようであるが経営は楽ではないように見受けられた。小諸で乗り換え、上田には10時



42分に到着した。車窓から見える家々は昔の萱葺屋根の家はほとんどなく立派な瓦葺の家であり、当然室内も近代化されていると思われる、わが国の発展が全国各地に渡っていることを感じた。上田からは上田交通に乗り換えるのであるが多少時間があつたので、駅の案内所で、塩田平方面の時刻表や案内のパンフレットを貰い情報を仕入れた。上田11時10分発の上田交通

のワンマンカーで塩田町まで行くと別所温泉行きのシャトルバスに接続しており、それで無言館(上の写真)へ向った。無言館は十字架型の建物に第二次世界大戦で戦没した画学生の遺作(収蔵品300点以上の絵画や彫像から85点を展示)や戦場からの書簡や愛用品などが展示されている美術館である。バス停から無言館までは徒歩5分ほどの緩やかな坂道であった。途中、観光バスの駐車場があり、中高年の女性を中心とした一団と出会った。平日のためか若い人の訪問者はほとんどなく、来訪者数自体まばらで、



運営は相当厳しいのではないかと推察された。入場は無料で、500～1000 円の寄付希望と表示されていた。戦没画学生の年齢は 20 代で、作品には国家的使命と若くして命を落とす無念さが窺え断腸の思いがした。戦後 60 年、現役世代に戦争体験者がいなくなり、団塊の世代も定年を迎える大きな区切りの時代になったことを痛感した。



無言館からバス道路を徒歩で前山寺へ向った。参道には櫨の大木が並び、歴史の深さを感じさせた。前山寺は弘仁年間(810～824)に弘法大師が開き、のちに塩田北条氏の祈願所、真言宗の信濃四談林の一つとして栄えたと言う。参道の先には右に休息所、左に本堂があり、正面石段の両側には左に銀杏の大木、右にモクゲンジの大木、その奥に、重要文化財の未完成の完成

塔と呼ばれる三重塔(前頁の写真)があった。本堂の裏側には書院があり、そこからの上田市方面の眺めはすばらしかった(上の写真)。書院では景色を眺めながら住職夫人手作りのクRMおはぎを頂いた。前山寺から龍光院までは山沿いに紫陽花の道(下の写真)と呼ばれる遊歩道が完備され、丁度、額紫陽花が盛りであった。龍光院は北条国時が父義政の菩提を弔うために建てたと伝わる曹洞宗の寺。禅寺に相応しい静かなお寺であった。龍光院バス停から 14 時 22 分発のバスで塩田町へ戻り、上田交通のワンマンカーで上田へ、上田では 1 分の乗り換え時間しかなかったが駅員の協力で電車の発車を遅らせてもらい小諸経由で 16 時過ぎに軽井沢へ戻った。軽井沢駅から旧軽井沢へ通ずる広い道をウインドウショッピングをしながら東雲交差点へ、そこを右折して



ホテルへ戻った。夕食は軽井沢新聞のショップガイド誌にあったこの春オープンした「軽井沢亭」へ行った。場所は東雲交差点を北へ少し行った左側にあった。ここはフランス三つ星レストランで経験を積んだシェフの経営するレストランである。従業員はシェフを含めて男性 2 人のこじんまりした店であったが料理はすばらしかった。帰りに、東雲交差点近くのベーカリーに立ち寄り明日の朝食の材料を買って帰った。

7月21日(木)

この日は塩沢湖周辺を散策することとした。場所は中軽井沢の南側である。軽井沢



駅北口から出ている軽井沢町町内循環バス(外回り)を利用した。10時10分に軽井沢駅を出発し、新幹線をくぐり左手に、プリンスショッピングプラザを見ながらまっすぐに南に進む。道路は走行路の両側にゆったりと緑地帯をとり、その外側に幅広い歩道が整備され、高層の建物は全くなく、洋風の平屋のレストランなどがところどころにあるという

アメリカの郊外を思わせる風景が広がっていた。バス停押立山下で右折して、狭い田

舎道を進み、しばらく行くとニュータウン入り口と言うバス停で時間調整をした。ここにはレマン湖という湖があり、その周辺にシルビヤレイクニュータウンという南軽井沢の別荘地が広がっている。峠を越えると発地川に沿って農地が広がっていたが田んぼのほとんどは休耕田となっていた。道路の両側には農家が点在していたがここでも後継者不足が顕著のようである。農村白書によれば



2003年の農業就業者のうち65歳以上が約6割、70歳以上が全体の1/4を占めると言う。バスは国民宿舎入口のバス停を右折して進んだ。私ども

は風越公園で下車した。1998年の長野オリンピックでカーリング競技が行われた軽井沢風越アリーナ、スカップ軽井沢、総合グラウンド、植物園、オリンピックの森などが点在していた。ここでは予定していた軽井沢町植物園(上の写真)を散策した。軽井沢は霧が多く、夏でも30度越すことがほとん





どない気候と湧水が豊富な環境から他では見られない植物が多いという。余り広い面積はないが145科1600種の草花や樹木が栽培展示されている。ほとんどの草花に名前が表示されていた。数年前には両陛下も立ち寄られたようで、薬草園の一角に記念碑があった。風越公園を出て右手の軽井沢絵本の森美術館、左手にエルツのおもちゃ博物館のある坂道を下ると左手

に有島武郎別荘(浄月庵)ライブラリーカフェ(一房の葡萄)(前頁下の写真)、右手に軽井沢文庫、野上弥生子書斎、堀辰雄山荘などがあつた。軽井沢文庫では作曲家武満徹「高原の風と音楽～作曲家・武満徹のすべて～展を開催していた。川を渡ると右手に軽井沢タリアセンの中央ゲートがあつた。ここは塩沢湖を中心としたミュージアムとレクリエーション施設の集合体である。早速イングリッシュ・ローズ・ガーデン(上の写真)へ行ったが時期が過ぎており、2000株あるという薔薇はほとんど終わつていた。昼食は湖畔のレストラン「湖水」でセミ・セルフサービスのランチを食べた。食後、湖の周辺にあるペイネ美術館(「ペイネの恋人たち」シリーズで世界中で親しまれているフランスの画家レイモン・ペイネの原画、リトグラフ、愛用の画材などを展示)(前頁中段の写真)と明治四十四年館(明治44年建てられた木造の洋館、かつて、別荘の人々の情報交換の場として利用されていたところ、現在は2階に「深澤紅子野の花美術館」がある)(右の写真)を見学した。ここで北ゲートを出て自動車道を中央ゲートまで戻り、西武高原バス急行で軽井沢駅へ戻つた。駅前通りでブルーベリーソフトクリームを食べ大賀ホールの北側を通過してホテルへ戻つた。ホテルで一休みしてから昨日行った軽井沢亭の直ぐそばにある赤坂飯店へ行き夕食を食べた。赤坂飯店は東京にいくつか店がある歴史のある中華料理屋という。



7月22日(金)

朝食は向かいにあるホテルハーベスト旧軽井沢のビュッフェレストランへ行った。午



前中は主に軽井沢駅南の軽井沢プリンスショッピングプラザへ行った。ここはアウトレットショップを中心に、みやげ物店や味の店が出店している。EastとNew East地区にあるナイキ、L.L.Bean、ティンバーランドなどを見て回った。プラザ中央の芝生の広場、池、建物が調和してすばらしかった(左に写真)。11時ごろ、プラザから旧軽井沢行き

のバスで移動。軽井沢銀座をウインドウショッピングした(下の写真)。店の入れ替わりがかなりあるようで、ガイドブックに表示されていても実際にはない店もあった。茜屋

珈琲店あたりまで行き、軽井沢観光会館まで引き返し、左折して、銀座カレンへ立ち寄った。軽井沢のこの店は10年以上続いた店であるが今年の夏で閉店するそうである。特別セールをしていたので、記念に一枚購入した。その道を軽井沢会テニスコートの方向に進み、万平ホテルに行った。途中、地元の酒屋に立ち寄り「どむろく」と言う酒を購入した。家



内の話によると美味しいそうである。後でインターネットで調べたところ通信販売もやっているようだ。万平ホテル(下の写真)は一世紀を超える軽井沢の歴史そのもので館内に資料室があり、大正から昭和にかけて使用した調度品が陳列されていた。カフェテラスで昼食。クラシックホテルならではの安らぎを感じるひと時であった。顧みれば、私が軽井沢へ始めて訪れたのは半世紀以上前の中学時代であった。学校の林間校舎が中軽井沢(当時は沓掛)にあり、そこにしばらく滞在して、浅間山登山、鬼押し出し、妙義山登山、星野温泉、白糸の滝、三笠会館など軽井沢周辺を散策し森林浴を満喫したことを思い出す。草軽電鉄を舞台にした「カルメン故郷に帰る」と言う映画があっ



たように思う。当時は信越線が松井田付近でスイッチバックし、軽井沢までの最後の部分は 1000 米で 66 米上昇する急勾配をアプト式機関車で登る日本でもめずらしい鉄道であった。その後、車両の軽量化と動力の分散、トンネル掘削技術の進歩などで高崎から直接軽井沢へ行けるようになり更に、長野オリンピックに合わせて長野新幹線が開通し、軽井沢までの所要時間は著しく短縮された。

四半世紀前には、会社の旅行で晴山ゴルフ場でゴルフを楽しんだことも昨日の出来事のように思い出される。そのときは軽井沢スケートリンク付近に宿泊したが、西武グループの創始者堤康次郎氏の 1918 年に開始した沓掛から始まる地域開発に対する貢献に対して軽井沢町長の感謝状を記した石碑があった。最近の西武グループの問題を思うと隔世の感を禁じえない。



この間、浅間山の北部地区を含めて何回か自動車で軽井沢を訪問したが、碓氷バイパス開通による自動車によるアクセスの改善など、この半世紀の軽井沢の変化のスピードの速さには驚かされる。万平ホテルからは矢ヶ崎川に沿って、ホテルへ戻った。夕食はホテルのレストランでフランス料理を楽しんだ。

7月23日(土)

朝はホテルのバイキング料理で済ませ、旧軽井沢周辺(上の写真)を散策すると共に、大賀ホール(右の写真)の建物内部を見学して過ごした。11時前にチェックアウトし、駅まで送ってもらい、12時過ぎの新幹線で帰京した。17時前に、関東地区に比較的強い地震があり交通機関が一時麻痺したが、16時には帰宅していたので遭遇することはなかった。

